

契丹語の音調

大竹昌巳

京都大学

【要旨】 本稿では、10–12世紀に中国東北方で話された、モンゴル諸語と系統関係を有する契丹語の語音調がどのように実現したかを、当時当地で使用された遼代漢語との対音資料を用いて実証的に明らかにする。予備的作業として、先行研究の発見にかかる、契丹小字文献中の漢語語彙に見られる特殊表記を批判的に検討して定量的に再分析し、そこから遼代漢語の声調体系に関する重大な帰結が導けることを論じる。その帰結を前提として、遼代漢字文献中の契丹語音訳語彙に使用される音訳漢字を音写語内の位置別に定量的に分析し、位置による顕著な声調の選好が存在することを明らかにする。さらにこの選好を遼代漢語の時間的変異性に着目して現代モンゴル諸語の音調も参考に解釈することで、契丹語が語の始端境界と終端境界をL音調とH音調とでそれぞれ標示する言語であったことを明らかにする*。

キーワード：契丹小字、契丹語、遼代漢語、声調、境界音調

1. 序論

1.1. はじめに

本稿では、10–12世紀に現在の中国東北部を中心とする地域に遼朝（契丹国）を建国した契丹人の言語である契丹語（マクロモンゴル語族）がどのような語音調（もしくは句音調）を有したかを、当時当地で使用された遼代漢語（シナ＝チベット語族）との対音資料を利用して明らかにする。本稿の構成を以下に述べる。本節の残りの小節では、本稿の議論に必要な漢語音韻史に関わる概念と中近世間の北方漢語の変遷について手短かに述べる。2節では、契丹小字の一般的な表記特徴について概観したのち、契丹小字文献中の漢語語彙に見られる特殊な表記形式に焦点を当て、それを定量的観点から再分析することで遼代漢語の声調体系再建のための重要な手がかりが得られる過程を論じる。3節では漢字文献中の契丹語音訳語彙に使用される音訳漢字を定量的に分析する。音写語内の位置による漢語声調の選好を明らかにした上で、続く4節では初期遼代漢語音の特殊性と現代モンゴル諸語の音調について触れ、それらを手がかりに音訳漢字の選択傾向を解釈する。

* 本研究はJSPS科研費（研究活動スタート支援）「契丹語と遼代漢語の双方向的な研究」（20K21956）および同（若手研究）「契丹文字墓誌資料の文献学的・言語学的研究」（22K13114）の助成を受けたものである。

1.2. 中古漢語の四声と清濁およびその変遷

本稿では漢語声調を手がかりとして議論を進めるが、そのためには伝統的な漢語音韻学の用語と枠組みの使用が避けられないため、以下では関連する用語について説明を加えながら、北方漢語における声調および関連事象の変遷について概観する。

1.2.1. 四声

南北朝末期（6世紀後半）の言語状況を反映する陸法言『切韻』の音韻体系（狭義の中古音）では、語彙的に指定された要素として各音節が平声・上声・去声・入声の4類から成る「四声」のいずれかを伴ったが、これは一般に声調（tone）、特にその調形（tone contour）に関わるカテゴリーだと理解されている。ただし、入声は内破音韻尾（-b, -d, -g等）を伴う音節にのみ生起し、「促声」とも称されるように短促をその特徴としており、生起する音節が入声と相補分布する「舒声」と総称される他の3類とは性格が異なっているため、ここで言う調形は単に音高（pitch）の昇降のみを指すものではない。またこの「舒促」とは別に、平声以外の3類を「仄声」と総称して平声と対置させた「平仄」という概念がある。

本稿では広義の中古音として、『切韻』の体系ではなく慧琳『一切経音義』に反映される唐代中期（8世紀後半）の首都長安（現西安）の音韻体系（以下、「唐代長安音（TC）」と呼ぶ）を参照するが、四声の枠組みに関して両者に差異はない。本稿では、平声1、上声2、去声3、入声4として四声を推定音の右肩に数字で示す（e.g. 「平」[TC byeŋ¹]）¹。

1.2.2. 清濁

「清濁」は声母（音節頭子音）の発声類型（phonation type）に関わる概念である。声母は伝統的に三十六字母を用いて記述されるが、これらは清濁の観点から全清音・次清音・全濁音・次濁音の4類に分かたれる（表1）²。唐代長安音では、次濁音のみが（閉鎖音では前鼻音を伴う）有声音であり³、その他の無声声母は、全濁音が弛声音（slack-voiced, 朱曉農 2010b）、次清音が有気音、全清音が最も無標な“tenuis”の声母であったと推定される。

¹ 唐代長安音の推定音は大竹（2020: 188–201）に拠り、一部表記を改めて用いる。なお、実際には唐代長安音において後述の全濁上声の去声への合流を示す音註が見られるが、便宜上、推定音では一律に合流前の四声を示す。

² 本来の三十六字母では中古音で音素対立をなす正歯音の二等（そり舌音）と三等（齒茎硬口蓋音）が区別できないため、ここでは李榮（1952）の用語に従って本来の照・穿・牀・審・禪母を莊・初・崇・生・俟母と章・昌・船・書・常母とに分ける。

³ 鼻音韻尾（-m, -n, -ŋ等）を有する次濁音音節では閉鎖音声母が鼻音として実現したことが知られるが（Maspero 1920: 28–41）、本稿では一律に^hm-, ^hd-, ^hd-, ^hg-と表記する。

表1 唐代長安音の声母と対応する三十六字母

	閉鎖音声母				持続音声母			ゼロ声母	
	全清音	次清音	全濁音	次濁音	全清音	全濁音	次濁音	全清音	次濁音
唇音	幫 b-	滂 p-	並 b-	明 ^m b-	非敷 f-	奉 f-	微 v-		
舌頭音	端 d-	透 t-	定 d-	泥 ⁿ d-			來 l-		
舌上音	知 d-	徹 t-	澄 d-	娘 ⁿ d-					
齒頭音	精 dz-	清 ts-	從 dz-		心 s-	邪 s-			
正齒音 _二	莊 dz-	初 tʃ-			生 s-	崇俟 s-			
正齒音 _三	章 dz-	昌 tʃ-			書 s-	常船 s-	日 z-		
牙喉音	見 g-	溪 k-	群 g-	疑 ^ŋ g-	曉 x-	匣 x-		影 ' -	喻 ∅

1.2.3. 中近世間北方漢語における変遷

北方中国では、中古漢語から近世漢語へと移る過程で、清濁体系の変容に伴い声調体系が大きく変化した。そもそも弛声音は後続する韻母入りわたりの breathy な音色に特徴づけられ (Ladefoged & Maddieson 1996: 63–66, 朱曉農 2010a: 83–92), その声帯の弛みが音節発端高度の低下を招くため、中古漢語では非弛声音たる清音 (全清・次清音) と弛声音たる全濁音の各音節には高調 (high register) たる「陰調」と低調 (low register) たる「陽調」という調域 (tone register) の音声的差異が附随したとみられる⁴。中近世間には、この弛声性という清濁対立の根本をなす声母の音韻特徴が失われたことで、随伴的特徴であった陰陽調の差異が音韻対立を生じ、調形 (四声) と調域 (陰陽調) とから成る複合的声調体系が成立するに至った。なお、次濁音は「不清不濁」とも称されるように潜在的には清濁に関して中立的なカテゴリーであるが、現代の官話諸方言 (晋語を含む) からみるかぎり、次濁平声・去声音節が陽調に、次濁上声・入声音節が陰調に帰属するのが中古以来の北方漢語での大勢であったと考えられ⁵、唐代の長安音でも同様であったことが日本の漢音資料から窺われる⁶。

清濁消失の際、全濁閉鎖音は無気閉鎖音の全清音と有気閉鎖音の次清音のどちらと合流するかが問題となる。歴史的には、12世紀西夏語対音資料が示すように、

⁴ 唐代の北方音に清濁に起因する高低調域の差異があったことは、例えば、それを母胎とする日本漢音の声調に関する文献記述や声明資料から知られる (小西 1948: 474–554, 金田一 1951, 頼 1951)。

⁵ 現代諸方言での中古声調との対応通則については曹志耘主編 (2008: 001–016) や錢曾怡主編 (2010: 34–41) を参照。官話方言のほとんどで去声の陰陽対立は存在しないが、河北省の北東部や中西部の冀魯官話地区には、軽声の前でその対立を保持する方言 (Giet 1946: 251–253, 河北省昌黎縣志編纂委員會等 1960, 楊福綿 1960, 李旭 2008: 100–103) や、単字調でも対立のある方言 (陳淑靜 1994, 楊同用 1996, 河北省地方志編纂委員會 2005: 215–218) が存在し、それらの多くで、次濁去声音節は全濁去声音節と、また去声音節に合流した次濁入声音節は清去声音節と同じふるまいをする。中原官話や蘭銀官話でも、次濁入声音節は清入声音節と同じ調類に属し、全濁入声音節とは一線を画す。

⁶ ただし次濁去声音節の帰属は、声点資料 (沼本 1982: 947–1032) や声明資料 (頼 1951) では去声の陰陽調 (軽重) の区別自体が不明瞭なため、明確ではない。

一律に次清音と合流した西北方言が存在し（龔煌城 1981, 李范文 1994: 117-155, 209-268), 今でもこの地域はその痕跡を留めるが, 現代の北方中国で最も広汎に分布するのは, 平声で次清音, 仄声で全清音と合流するタイプである（曹志耘主編 2008: 039, 錢曾怡主編 2010: 22-23)。また, 唐代長安音ではゼロ声母を除き阻害性が顕著だった次濁音は, 近世音では共鳴音に変じた。

声調体系の複雑化の一方で, いくつかの声調カテゴリー（調類）には合流が生じた。全濁上声（陽上声）音節の去声化は『慧琳音義』など唐代資料でもすでに広く確認され（周法高 [1948] 1968: 165-168), 北方にとどまらない広汎な地域に波及した音変化である（何大安 1988)。また, 陰陽去声は対立を失い, 現代の北方漢語で対立を保持する方言は少ない。

入声音節は内破音韻尾の消失と舒声化を経て, 本来の舒声音節に合流する変化が生じた。現代の北方漢語では, 晋語や江淮官話で入声調が舒声化せずに保持され, 一部の方言で舒声化しつつも独立の調類として保持されるが, 多くの方言では他の調類に合流して入声が消滅している。そのパターンは官話方言内部でも差異が大きく, 全ての入声が入声の1つの調類に合流する西南官話や, 陰入声（清・次濁入声）と陽入声（全濁入声）とで異なる調類に合流する中原・蘭銀官話も存在するが, 北京・東北・冀魯・膠遼官話といった劉勳寧（1995）の言う「北方官話」では清・次濁・全濁入声の3類がそれぞれ異なる変化を示す。ただし, 北方官話では全濁入声は陽平声に, 次濁入声は去声に合流する点が共通するが, 清入声の合流の様相は方言間でも, 同一方言内でも, 一様ではない（李榮 1985, 1989)。

卓從之『中州楽府音韻類編』（および周德清『中原音韻』）に反映される元代（13-14世紀）の首都大都（現北京）の音韻体系（以下, 「元代大都音（YC）」と呼ぶ）は, 上述の（特に北方官話的な）官話方言の特徴が出揃っているため「古官話」とも称されるが, その調類は図1のように再編されている。清入声音節は整然と上声音節に合流しているが, 全清音に分類されるゼロ声母の影母音節のみは, 次濁音のゼロ声母である喻母と同じく去声音節に合流している。本稿では近世音としてこの元代大都音を参照するが, その調類は陰陽調の別がある場合は陰平声 1a, 陽平声 1b のように数字に a または b を加えて推定音の右肩に標示する⁷。なお, このような陰陽調や四声による調類の名称は, その歴史的起源を示したものであり, 清濁対立を失った後には, 陰調が対応する陽調より低い調域をとることも, 同じ四声の陰調と陽調とが異なる調形をとることもありうる。

⁷ 推定音は大竹（2020: 201-204）に拠り, 一部表記を改める。

清濁\四声	平声	上声	去声	入声
清音	陰平声	上 声	去 声	上 声
次濁音	陽平声			陽平声
全濁音				

図1 中古漢語の四声・清濁と元代大都音の調類の対応

1.3. 遼代漢語の声母と声調

本稿で扱う遼代漢語は、当時の漢語圏の東北辺境にあたる幽燕地方（現在の北京・天津を含む河北北部から遼寧西部）を中心とする遼朝支配域で10-12世紀に使用された漢語変種である。遼代漢語音を知る手がかりとなる文献資料は何種類かあるが、有力なのは本稿でも用いる契丹文字文献中の漢語訳音と漢字文献中の契丹語訳音の2種類の対音資料である。

遼代漢語音は年代上、唐代長安音と元代大都音の中間に位置するが、契丹小字文献中の漢語語彙を用いた研究では、元代大都音と共通する官話方言的特色を帯びていたことが指摘されている（沈鍾偉 2006）。声母の清濁に関しても、全濁音が平声で有気音、仄声で無気音となってそれぞれ次清音、全清音と合流する官話方言の特徴を示すことが漢語語彙の契丹小字表記の分析から明確に論証されている（大竹 2020: 205-225）。一方、声調に関しては、以下に紹介する沈鍾偉（2012）の先駆的研究があり、それを発展させて声調体系全体について論じた傅林（2019: 246-257）や大竹（2020: 394-419）の研究があるが、論証過程や結論には説得的とはいいがたい部分もある。本稿の目的は遼漢対音資料を用いた契丹語音調の復元にあるが、その目的の達成のためには遼代漢語声調が堅実に再建されていることが保証されなければならない。そこで次節では、先行研究とは重複する議論もあるが、契丹文字文献を用いた遼代漢語の声調体系の再建プロセスについて、行論に必要な範囲で詳しく論じる。

2. 契丹小字文献中の漢語語彙の特殊表記からみた遼代漢語の声調体系

2.1. 分析材料

契丹語を表記するための文字体系である契丹文字には、契丹大字（920年創製）と契丹小字（925年頃創製）という2種類の文字体系があるが、本稿では扱う現象がより高頻度で観察される後者のみを分析対象とする。契丹小字は、まとまった分量のある石刻資料が現在約40点公表されており（ほとんどが契丹人の墓誌銘）、そのすべての拓影が清格爾泰等（2017）に収録されている。契丹人は遼朝（907-1125）滅亡後、金朝（1115-1234）治下でも契丹文字を使用したため、文献の在証年代は遼金両代（1053年から1175年まで）にわたる。契丹小字の音価やそこから推定される契丹語の音韻体系については未だ研究者間に意見の一致を見ないが、本稿では

大竹(2020)の枠組みを若干の修正を加えて用いる⁸。

遼朝は遊牧民である契丹人・奚人と定住民である漢人・渤海人を主要構成民族とする多民族国家で、とりわけ支配者層の契丹人は漢文化(中原文化)の影響を強く受けたため、契丹文字文献には多量の漢語語彙が含まれる。本研究では上記の資料から原語が特定可能な漢語語彙を収集して異なり漢字数248字種、延べ5514字を得た。その内訳は漢語由来の官称号や人名、地名、書名等で、漢語語彙を用いた契丹人名(e.g.「韓家奴」)も含む⁹。

2.2. 契丹小字の表記原理

はじめに契丹小字の基本的特徴を概観する。1単純語を表記する契丹小字の視覚上の単位「字」は、1つまたは複数の「字素」から成る。契丹小字は約370種類の字素を有するが(大竹2020: 28-30)、うち約120種類が〈母音+子音〉を表わすVC型字素、10数種類が長母音を表わすV型字素である¹⁰。その余は〈子音+母音+子音〉を表わすCVC型字素や〈子音+長母音〉を表わすCV型字素など、より総合的な音連続を表わす字素である。すべての字素が異なる音価をもつ。〈子音+短母音〉や短母音のみを表わす字素はなく、専ら子音のみを表わす字素もないため、/CVC/や/CVV/(/C/=子音、/V/=短母音、/VV/=長母音)という音連続を分析的に表記するには、頭子音/C/と残りの/VC/や/VV/とに切り分けた上で、/VC/や/VV/はしかるべきVC型・V型字素で、初頭の/C/は特定のVC型字素で表記する(1a)。また、長母音を含む/(C)VVC/のような音連続はV型(CV型)字素とVC型字素の連続によって表記するが、そのVC型字素の表わす母音は、当該長母音と音韻的に類似していなければならないという「母音重複規則」が存在する(Ötake 2017)。

- (1) a. 丹九來 <ɔb-əg-əj> bəgəj (人名)¹¹
 九及女 <əg-uu-un> guun 「玉(ぎよく, 属格形)」
- b. 圪九 <bid-əg> bidəg 「文字」
 う女 <juu-un> juun 「夏」

⁸ 以下に推定される契丹語の音素目録を示す：短母音 ə, a [a], u, o [ɔ], i, e [ɛ], ü [y], ö [œ]；長母音 əə, aa [a:], əə [o:], oo [ɔ:], uu, oo, ii, ee, ää [ɛ:], öö [œ:], üü [y:]；強阻音素 p [pʰ], t [tʰ], s [sʰ], č [tʃʰ], š [ʃʰ], k [kʰ], ɣ [ɣʰ], ɣʷ [ɣʷʰ]；弱阻音素 b [p], d [t], z [s], j [tʃ], ž [ʃ], g [k], gʷ [kʷ], ɣ [ɣ], ɣʷ [ɣʷ]；接近音 w, r, y [j], b [ʔ], bʷ [ʔʷ], b [ʕ], bʷ [ʕʷ]；鼻音 m, n, ŋ [ŋ] (nは阻音音の前では同器官的な鼻音を表わす)；側面音 l, lʷ。

⁹ 漢語の2音節(漢字2字)が表記上1語化しているもの(e.g. 丕全 tayz「太子」)は除外する。また、明らかに遼代以前の古い借用語と考えられるものも含めない。

¹⁰ VC型字素の表わす母音は通常短母音だが、〈長母音əə+子音〉を表わすVC型字素もある(大竹2015)。また、〈母音+子音+子音〉を表わすVCC型字素も存在する。

¹¹ 本稿では契丹小字表記を示す際、小字表記のほか、必要に応じて < > 内に字素の音価を、またイタリック体で字単位のローマ字転写を示す。

上述のように契丹小字には CVC 型・CV 型字素のような、より総合的な音連続を表わす字素も存在するが、それらで表記できるのは契丹語に生起しうるあらゆる〈子音+母音+子音〉や〈子音+長母音〉のうちの一部であり、それ以外は VC 型・V 型字素を組み合わせて分析的に表記するしかない。また、CVC 型・CV 型字素で表記可能な音連続は理論的には、(1b) の *bidæg* や *juun* を 丹丸兀 <ɔb-id-æg> や 朮及女 <ɔj-uu-un> とするよう VC 型・V 型字素を用いて分析的に表記できるが、契丹小字の正書法では総合的に表記可能な音連続を分析的に表記することは認められず、こうした実例はほとんどない。それゆえ、ある音連続の契丹小字での表記のしかたは、しかるべき CVC 型・CV 型字素の有無にかかわらず、母音重複規則や語頭子音表記に関する一部の表記ゆれを除いて事実上 1 通りしかなく¹²、この点で、契丹小字は同音異義語を書き分けることのない、きわめて表音主義的な表記体系だと言える。

2.3. 契丹小字における漢語語彙の一般的表記法

漢語語彙は通常、漢字 1 字に相当する 1 音節を契丹小字の 1 つの「字」で表記するが、その表音原理は固有語の表記と変わるところがない。(2a) は開音節（ゼロ韻尾音節）の例、(2b) は閉音節（有韻尾音節）の例である。

- (2) a. 礼 *<ɔl-ii>* *lii* 「禮」 [TC lye², YC li²] (URH 7)¹³
 今 *<puu>* *puu* 「夫」 [TC fū¹, YC fu^{1a}] (DZ 2)
- b. 开 *<ɔæg-ay>* *kay* 「開」 [TC kay¹, YC kay^{1a}] (TAD 2)
 太 *<tay>* *tay* 「太」 [TC tɔy³, YC tay³] (HB 1)
 朮及朮 *<ɔl-aa-an>* *laan* 「蘭」 [TC lɔn¹, YC lan^{1b}] (URH 4)
 朮及朮 *<xaa-an>* *xaan* 「韓」 [TC xɔn¹, YC xan^{1b}] (TAY 13)

ここでは漢語声調の区別が通常は書き分けられないことを確認しておきたい。例えば、(2a) の 今 *puu* は平声字「夫」だけでなく上声字「府」 [TC fū², YC fu²] (PUL 6) や去声字「傅」 [TC fū³, YC fu³] (URD 34)、入声字「佛」 [TC fūd⁴, YC fu^{1b}] (YER 14) の表記でもある。

2.4. 漢語特殊表記の発見

ところが、漢語語彙の表記に関しては興味深い現象が報告されている (Shen 2007: 155, 沈鍾偉 2012)。沈鍾偉 (2012) によれば、以下の 3 種類の特殊な表記形

¹² 母音重複規則は完全な母音の一致を要求するものではなく音韻的類似があればよく、語頭子音に関しては弱阻害音に 2 通りの表記方法があるため、表記ゆれが存在する。

¹³ 以下、契丹小字文献での語例の出所を () 内に略号 (本稿末尾の略号一覧参照) で示す。略号右の数字は当該文献内での出現位置の行数を示す。なお、多くの語例は複数の文献での在証例があるが、ここではスペースの都合で 1 例のみ示してある。

式が存在し、そのいずれもが漢語去声音節と関係するという¹⁴。

- (3) a. 同一母音を表わす字素の重複使用：(C+) V₁ + V₂, V₁ = V₂
 凡关关 <əg-ii-ii> *gii*^L 「騎」 [TC ɡi³, YC ɡi³] (O.JUR 19)
 舟又又 <əb-uu-uu> *buu*^L 「步」 [TC ɸwɔ³, YC bu³] (TOG 10)
- b. 半母音韻尾音節 (C)VG における字素の増加：(C+) V₁G + V₂, G = V₂
 令𠂔𠂔 <əəd-ay-ii> *day*^L 「大」 [TC ɖay³, YC ɖay³] (K.DIL 4)
 又𠂔𠂔 <əəʒ-ew-uu> *šew*^L 「少」 [TC šyew³, YC šyew³] (TAY 22)
- c. その他の転写形式：CV₁ + V₂, V₁ = V₂
 𠂔𠂔 <puu-uu> *puu*^L 「傳」 [TC fū³, YC fū³] (DIW 8)

(3a) は V 型字素の直後に同一の V 型字素を綴る形式、(3b) は〈母音 + 半母音〉を表わす VC 型字素の直後に当該半母音に対応する母音を表わす V 型字素を綴る形式、(3c) は CV 型字素の直後に同一母音を表わす V 型字素を綴る形式である。沈鍾偉 (2012) は指摘しないが、〈子音 + 母音 + 半母音〉を表わす CVC 型字素の直後に V 型字素を綴る形式も確認される。

- (4) 𠂔𠂔 <tay-ii> *tay*^L 「太」 [TC tay³, YC tay³] (UJE 17)
 𠂔𠂔 <daw-uu> *daw*^L 「盜」 [TC ɖaw³, YC ɖaw³] (UMR 45)

これらの表記形式は、いずれも V 型字素が 1 つ余分に綴られるという共通点をもつ。2.2 節で述べたように V 型・CV 型字素が表わす母音はそれ自体長母音なので、(3a, c) のようにさらに V 型字素を加えるのは、契丹語の母音の長さに三項対立が存在しない限り、音韻論的には余剰である。実際、こうした字素連続は固有語の表記では通常見られない (大竹 2015: 87–91)。また、〈(子音 +) 母音 + 半母音〉を表わす (C)VC 型字素に V 型字素が後接する表記は固有語でも珍しくないが、その意図は 𠂔𠂔 <uy-ii> *uyii* 「来て」のように後続母音の表記であり、(3b, 4) のようにすでに (C)VC 型字素によって表記されている末子音をさらに標示するために V 型字素を用いるのは余剰である。こうした余剰性に加え、これらの漢語語彙が一般的な表記形式によっても綴られるという点で随意的な現象であることから、この表記形式は契丹小字の表記体系の中では特殊な綴り字であると言える。この特殊表記は共通の意図をもつと想定されることから、以下では総称して「余剰表記」と呼ぶことにする。

この余剰表記は去声音節を表わすとされるが、ここには中古漢語の全濁上声音節 (5a) と次濁入声音節 (5b) も含まれる。1.2.3 節でみたように、これらは元代大都音や北方官話で中古去声音節に合流しており、沈鍾偉 (2012) は余剰表記がこれらに対しても使用されることから、遼代漢語ですでにこれらの去声音節への合流が生

¹⁴ 以下の例は沈鍾偉 (2012) によるが、音価・ローマ字転写等は本稿の方式に改めた。本稿ではこの特殊形式を、字単位のローマ字転写では右肩に L を付すことで標示する。

じていたと論じている。

- (5) a. 𠬞𠬞𠬞 <əɒb-uu-uu> *buu*^L 「部」 [TC ɸwɔ², YC bu³] (NU 13)
 𠬞𠬞𠬞 <ij-ew-uu> *jew*^L 「趙」 [TC ɸjɛw², YC džjɛw³] (URH 9)
 𠬞𠬞𠬞 <χuu-uu> *χuu*^L 「戸」 [TC χwɔ², YC xu³] (GAW 22)
 b. 𠬞𠬞𠬞 <əl-aw-uu> *law*^L 「洛」 [TC laɣ⁴, YC law³] (URD 1)
 𠬞𠬞𠬞 <əy-aw-uu> *yaw*^L 「藥」 [TC yaɣ⁴, YC yaw³] (S.DIL 31)

沈氏の発見は、通常では声調の区別を書き分けられない契丹小字の表記体系において一部その書き分けが存在することを明らかにしたという文字表記論的視点だけでなく、遼代漢語の声調体系の一端を知る手がかりを得たという漢語音韻史的視点からも極めて重要であるが、沈鍾偉 (2012) は余剰表記という現象の全体像を過不足なく捉えられてはいない。

2.5. 沈鍾偉 (2012) の問題点

第一の問題点は、余剰表記とみなすべき他の表記形式を見逃している点にある。沈鍾偉 (2012) はゼロ韻尾音節と半母音韻尾音節に関わる余剰表記を見出したが、鼻音韻尾音節に関しては明確な結論を見出せていない (沈鍾偉 2012: 44)。しかし、次のような例がある。

- (6) a. 𠬞𠬞𠬞 <ii-im> *im*^L 「蔭」 [TC 'im³, YC im³] (MEN 23)
 𠬞𠬞𠬞 <əg-üü-ün> *gün*^L 「郡」 [TC g'ün³, YC g'ün³] (LAO 22)
 𠬞𠬞𠬞 <əz-aa-an> *šany*^L 「上」 [TC šyaŋ³, YC šyaŋ³] (TOG 10)
 𠬞𠬞𠬞 <əg-ii-ing> *king*^L 「慶」 [TC k'yeŋ³, YC kiŋ³] (NU 13)
 𠬞𠬞𠬞 <əg-ii-əng> *king*^L 「慶」 [TC k'yeŋ³, YC kiŋ³] (HB 24)
 b. 𠬞𠬞𠬞 <əg-ing-əng> *king*^L 「慶」 [TC k'yeŋ³, YC kiŋ³] (UMR 20)

契丹語では漢語の -m, -n 韻尾音節を、原則として音節核が非狭母音であれば長母音を含む音節として受容し (e.g. 𠬞𠬞𠬞 <əz-aa-am> *saam* 「三」 [TC sam¹, YC sam¹] (PUL 6), 𠬞𠬞𠬞 <əɔd-ee-en> *teen* 「天」 [TC tyen¹, YC tyen¹] (UMR 18)), 狭母音であれば短母音で受容する (e.g. 𠬞𠬞 *im* 「音」 [TC 'im¹, YC im¹] (DIW 14), 𠬞𠬞 *gün* 「郡」 [TC g'ün³, YC g'ün³] (URH 4))。それに比べると (6a) の 𠬞𠬞𠬞 <ii-im>, 𠬞𠬞𠬞 <əg-üü-ün> は V 型字素が余分であり、余剰表記とみなせる¹⁵。漢語の舌背音韻尾音節については解釈に余地があるが、基本的には音節核の広さに関わらず短母音で受容するのが原則である (e.g. 𠬞𠬞 *šany* 「上」 [TC šyaŋ³, YC šyaŋ³] (GAW

¹⁵ 非狭母音の音節核をもちながら短母音で受容される 𠬞𠬞 *dem* 「點」 [TC dyem², YC dyem²] (O.JUR 20), 𠬞𠬞 *gem* 「檢」 [TC gyem², YC gyem²] (TAD 2) のような例と比べると 𠬞𠬞𠬞 *deem* 「點」 (D.CAL 9), 𠬞𠬞𠬞 *geem* 「檢」 (O.JUR 20) は余剰表記に見えるが、用例数から見ても後者が一般的な表記であり、かつ短母音 *e* (咽頭化音) と長母音 *ee* (非咽頭化音) とは単純な長短の対をなさないため、これらを余剰表記とはみない。

20), ㄨ 同 *king* 「慶」 [TC k³yeŋ³, YC kiŋ³] (NU 12)。ゆえに (6a) の ㄨ ㄨ ㄨ *<əəz-aa-ary>*, ㄨ ㄨ 同 *<əəg-ii-ing>* も V 型字素が余剰で、余剰表記とみなせる¹⁶。ㄨ ㄨ ㄨ *<əəg-ii-əng>* は母音重複規則に関わる ㄨ ㄨ 同 *<əəg-ii-ing>* の変異形で、同様に余剰表記とみてよい¹⁷。(6b) は鼻音韻尾を表わす VC 型字素 ㄨ *<əng>* が余剰であり、(3b) の半母音韻尾の重複表記と並行する。余剰なのが V 型字素でない点が他の余剰表記とは異なるが、余分な字素が加わるという共通点からこれも余剰表記とみなせる¹⁸。このように、通常の表記形式と比較すれば、鼻音韻尾音節においても余剰表記が存在することが分かる。

第二の問題点は、余剰表記によって表記される漢語語彙が中古全濁上声・次濁入声音節を含む去声音節に限らないという事実を疎略にしていることである。筆者のデータに拠って余剰表記の用例数を中古漢語の清濁・四声カテゴリー別に集計すると、表2を得る(各欄左側が表記する漢語音節のタイプ頻度(異なり漢字数)、右側の括弧内がトークン頻度)。

表2 中古清濁・四声カテゴリーごとの余剰表記のタイプ頻度とトークン頻度

清濁\四声	平声	上声	去声	入声
清音	2 (3)	0 (0)	20 (98)	0 (0)
次濁音	7 (15)	0 (0)	6 (20)	6 (9)
全濁音	4 (7)	10 (31)	15 (62)	1 (3)

- (7) ㄨ ㄨ ㄨ *<əy-iw-uu>* *yiw^L* 「遊」 [TC iw¹, YC iw^{1b}] (DZ 6)
 ㄨ ㄨ ㄨ *<əən-ii-ing>* *ning^L* 「寧」 [TC ⁿdyeŋ¹, YC niŋ^{1b}] (LAO 22)
 ㄨ ㄨ ㄨ *<əz-ii-ii>* *sii^L* 「齊」 [TC dzyey¹, YC tsi^{1b}] (URH 4)
 ㄨ ㄨ ㄨ *<əəb-eeŋg-əng>* *peeng^L* 「彭」 [TC ɸaŋ¹, YC pəŋ^{1b}] (URD 47)
 ㄨ ㄨ ㄨ *<əəz-əw-uu>* *səw^L* 「淑」 [TC ʃig^{w4}, YC šu^{1b}] (UYE 2)

余剰表記は去声各類・全濁上声・次濁入声の各音節のみならず、各種平声音節と全濁入声音節でも見られる(7)。沈鍾偉(2012: 45-46)も余剰表記が去声とは無関係な音節にも使用されることは認めるが、そうした例は大量の去声の例に比べれば占める割合が小さいと述べ、「例外」として扱っている。しかし、筆者のデータでは

¹⁶ 以下のような例は余剰表記とはみない。ㄨ ㄨ ㄨ *<əg-äa-ary>* *gääny* 「江」 [TC gaŋ¹, YC gyaŋ¹] (PUZ 13) は ㄨ ㄨ *<əg-ary>* *gary* 「江」 (URD 11) に比べると V 型字素が 1 つ多いが、その有無によって母音の音色自体が変化するので、余剰表記ではない。同様に、ㄨ ㄨ ㄨ *<ij-ee-eny>* *jeeny* 「章」 [TC dzyaŋ¹, YC dzyaŋ¹] (MEN 11)。「長」 [TC dyaŋ², YC dzyaŋ²] (MEN 13) は V 型字素が余剰に見えるが、前註に述べたように短母音 *e* と長母音 *ee* とは表わす音色が異なるから、余剰表記ではない。また、ㄨ ㄨ ㄨ *<əg-üü-ung>* *güüŋg^w* 「宮」 [TC giŋ¹, YC guŋ¹] (K.DIL 20) は通常 ㄨ ㄨ ㄨ *<əg-iw-ung>* *giwŋg^w* と書かれる語形の変異形であり、両者の母音の長さには差はないので余剰表記とはみなさない。

¹⁷ 契丹語の音韻体系では短母音 *ə* は短母音 *i* と前舌性を除き音韻的特徴が一致する。

¹⁸ 傅林(2019: 148)も(6b)を(3b)と同種の特殊表記とみなしている。

余剰表記の総数に占める次濁平声音節の割合が次濁入声音節を上回っており、全濁平声音節の割合も次濁入声音節と大差はない。次濁・全濁平声音節等を例外とみなす一方で、次濁入声音節を去声のうちを含めて正則とみなすのは、次濁入声音節の去声化という結論を予め前提としている論点先取に外ならない。

2.6. 余剰表記の再検討

上述の問題はしかし、定量的に解決することができる。いま、清濁・四声カテゴリーごとの全表記例に占める余剰表記例の比率を求め、比率の高い順に並べると、表3を得る。

表3 中古清濁・四声カテゴリーごとの余剰表記使用率

順位	カテゴリー	トークン数	比率	順位	カテゴリー	トークン数	比率
1	全濁上声	31/122	.254	6	全濁入声	3/57	.0526
2	次濁去声	20/130	.154	7	次濁平声	15/638	.0235
3	全濁去声	62/414	.150	8	全濁平声	7/490	.0143
4	次濁入声	9/77	.117	9	清平声	3/1748	.00172
5	清去声	98/913	.107	10	次濁上声	0/153	.00000
				11	清入声	0/281	.00000
				12	清上声	0/491	.00000

注目すべきことに、余剰表記の使用率によってカテゴリーを3群に分類すると、興味深い結果が得られる。余剰表記率10%以上の第1群は各種去声・全濁上声・次濁入声の各音節から成るが(平均値15.6%, 標準偏差5.2), これは元代大都音の去声音節に整然と対応する。また、余剰表記率1%以上10%未満の第2群は次濁・全濁平声音節と全濁入声音節から成るが(平均値3.01%, 標準偏差1.63), これも元代大都音の陽平声音節に整然と対応する。余剰表記率1%未満の第3群(平均値0.043%, 標準偏差0.074)は元代大都音の陰平声(清平声)と陰上声(清・次濁上声と清入声)の両音節に対応する。このことは、余剰表記が漢語声調と密接に関連する表記形式であることを改めて示唆するとともに、遼代漢語が、北方官話の特徴を示す元代大都音と類似の調類体系を有したことを物語っている。

なお、同一グループ内でも余剰表記率に差がある要因は概ね説明可能である。表4は余剰表記だけでなく全表記例のカテゴリーごとのタイプ・トークン比(type-token ratio, TTR)を示したものである(各欄左側がタイプ頻度, 中間の括弧内がトークン頻度, 右側がTTR)。

表4 中古清濁・四声カテゴリーごとの表記総数のタイプ・トークン比

清濁\四声	平声	上声	去声	入声
清音	121 (1748) .069	54 (491) .110	47 (913) .051	31 (281) .110
次濁音	60 (638) .094	21 (153) .137	22 (130) .169	16 (77) .280
全濁音	60 (490) .122	24 (122) .197	30 (414) .072	14 (57) .246

清去声は余剰表記率 10.7% と第 1 群の中では比率が低い、TTR も全カテゴリーで最低である。これは、「太」[TC tay³, YC tay³] (260 例のうち余剰表記 2 例) や「帝」[TC dyey³, YC di³] (126 例のうち余剰表記 3 例) のような頻出字を含むため、一般に頻出字は特定が容易なため、特殊表記を用いて声調を標示する必要が小さい。実際、「太師」(129 例) や「太尉」(52 例)、「皇帝」(124 例) のようにこれらの字は限られた語彙での使用が目立つ。仮に外れ値として両字を除くと、清去声の余剰表記率は 17.6% に上昇する (93/527)。

全濁上声の余剰表記率が突出して高いのは、高い TTR から示唆されるように、清去声のような頻出字がなく、特殊表記の必要性が大きいことと関連すると思われる。全濁入声の余剰表記率が第 2 群の中で高いのも、TTR の高さから説明可能であろう。

次濁入声が全カテゴリー中最高の TTR をとりながらも第 1 群の中では清去声に次いで余剰表記率が低いのは、別の強力な因子が存在するためである。次濁入声字の中で突出して高頻度の「密」[TC ^mb·id⁴, YC mu³] 35 例のうち 30 例は 又火 又刃 <əz-üü im-ür> *süü müir* 「樞密 (使)」という官称号で用いられる。分かち書きされることから漢語語彙としての意識があると考えられるため対象に含めたが、中古漢語の -d 韻尾を契丹語 -r で受容する音節が他にないことを加味すると、これは早期の漢語借用語であり、対象からは外すべきである¹⁹。この 30 例を除外するならば、次濁入声の余剰表記率は 19.1% に上昇する (9/47)。

以上の考察からも、各カテゴリーの余剰表記率が偶然の産物とは考えがたい。

2.7. 余剰表記率の意味

余剰表記の比率によって漢語音節は 3 群に分かたれる。これが意味するのは、各群が各々何らかの特徴を共有しているということである。このことは、同一群に属するカテゴリーがそれぞれ 1 つの調類にまとまることを意味するわけでは勿論ない。例えば、第 1 群が陰去声と陽去声という、ある特徴 (e.g. 調形) は共有するが別の側面 (e.g. 調域) では異なる特徴をもつ 2 つの調類を含む可能性は排除できない。同じように、遼代漢語で次濁入声が去声に合流していたことも、この現象から演繹的に証明することはできない。しかし、同一群 (のみ) が特徴を共有すること

¹⁹ 残り 5 例は 又火 又刃 <əz-üü im-ii> *süü müi* 「樞密 (院・副使)」(URD 12) という語で使用されるが、同時代の遼代漢語形としてはこちらが標準的な語形とみなせる。

は、異群間には必ず何らかの異なる特徴があることが含意されるので、ここから、異群に属するカテゴリーの間には調類の違いがあったことが帰結される。

この結論はきわめて重大な意味をもつ。沈鍾偉（2012）の発見は、元代大都音の去声音節に対応する遼代漢語の各種音節が共通の特徴を示すことを定性的に明らかにした。その論証には問題があるが、結果的には次濁入声音節を去声音節と同一群に含めながら、濁平声・全濁入声音節をそこには含めなかった判断も首肯できる。しかし、この発見の去声音節以外への貢献は限定的である。ところが、余剰表記率という定量的基準は、それらとは別に、次濁・全濁平声、全濁入声の各音節が、清平声、清・次濁上声、清入声の各音節とは異なる調類を成すことを明らかにする²⁰。すなわち、遼代漢語においては、中古漢語の清平声音節と次濁・全濁平声音節が、また清・次濁上声音節と全濁上声音節が、さらに清入声音節と次濁入声音節と全濁入声音節とが、それぞれ異なる調類に属していた。これは取りも直さず、遼代漢語で平声・上声・入声の各声調に陰陽調の分裂（入声については全陰・次陰・陽調の3類への分裂）が生じていたことを意味する（去声の陰陽分裂については定かでない）。

清濁\四声	平声	上声	去声	入声
清音	陰平声	陰上声	陰去声	全陰入声
次濁音	陽平声		陽去声	次陰入声
全濁音				

図2 中古漢語の清濁・四声と遼代漢語の調類（試論）

図2は以上の議論から推定される遼代漢語の調類を示したものである。余剰表記率が10%以上のカテゴリーは濃色で、1%以上10%未満のものは淡色で着色されている。濃淡の異なるカテゴリーは間違いなく異なる調類に属する。一方、同色のカテゴリー間の関係についてこの現象が教えるところはない。図では北方漢語の趨勢に鑑みて全濁上声は陽去声に合流していたと推定してある。しかし去声が陰陽調に分かれていたかどうかは明らかでなく、入声が独立の調類を成したか舒声のいずれかに合流していたかも明らかでない。図で去声両類および入声各類に独立した名称を与えたのは便宜的な措置である。

本節の最後に、余剰表記と調値の関係について一言しておく。筆者は遼代漢語の声調体系については別に準備があるので詳細はそこで論じるが、余分な字素を書き加えることが去声等の標示になるのは、その音節の持続時間が相対的に長かったために外ならない。去声が曲折調（降昇調）で、陽平声が上昇調であれば、その点を

²⁰ 傅林（2019: 251-254）も特殊表記の比率を用いた考察を行なっている。しかし、特殊表記の認定に関わる問題や、トークン頻度ではなくタイプ頻度を用いて集計していること、予め次濁平声と全濁平声を一類にまとめていることなど、方法論上の問題があり、次濁・全濁平声と全濁入声とを他のカテゴリーから分けることには成功していない。

うまく説明できるであろう²¹。

3. 漢字文献中の契丹語音訳語彙

3.1. 分析材料

遼代に遼朝支配域で製作された漢字石刻文献の中には数多くの漢字音写された契丹語の語彙が見出される。大竹(2020: 419-443)はこうした資料を用いて遼代漢語や契丹語の音韻特徴を論じているが、分析手法が個別事象の比較にとどまっている。そこで本節では、これらの音訳語彙に使用される音訳漢字を網羅的に収集して声調の観点から体系的に分析し、とりわけ音写語内の位置による調類ごとの使用頻度に着目することで、より客観的なデータによって音訳漢字が声調に関して一定の傾向を示すことを明らかにする。

この目的のために、筆者は向南(1995)、向南等(2010)、周阿根(2022)に収録される遼代漢字石刻文献およびそれら未収のいくつかの既発表文献を調査し、116点の文献(主に契丹人の墓誌銘)から契丹語(一部奚語を含む)の音写語延べ822例、漢字数にして1853字を収集した²²。音写語はほとんどが人名と官称号で、全体の8割以上の原語が特定できている²³。音訳漢字が多音字である場合には原則として最も常用と思われる音を採用したが、原語が判明している場合にはそれに最も適する音を優先して採用したことがある。

3.2. 全体的傾向

まず、中古漢語の清濁・四声と音写語内の位置によって分類した音訳漢字の頻度表を示す(表5)²⁴。表中、各欄右側の括弧内に示した数値は、推定される遼代漢語音(大竹2020による)において冷僻字を除いて他に同音異声調字が存在しないと考えられる字を除いた頻度である。例えば、中古次濁入声字の「烈・列」[TC lyed⁴, YC lye³]や「刺・喇」[TC la⁴, YC la³]は音訳漢字として語末を中心に頻用されるが(前二者は計40例、後二者は計30例)、これらの漢字が表わす遼代音の*lyeや*laという音節は通時的な理由で中古入声音節以外の起源をもたないため²⁵、

²¹ 傅林(2019)も去声を降昇調と推定しているが、その主要な論拠は筆者とはまったく異なっている。その論拠に問題があることも別稿で述べたい。

²² これらの資料集の録文には誤読もあるため、可能な限り原石の写真や拓影を赤峰文博院(2021)、蓋之庸(2007)、遼寧省博物館(2000)、北京圖書館金石組(1990)等や関連論文で確認したが、一部原石が未公表または亡失のため確認できない文献がある。

²³ 「契丹」のような遼代以前の音写語は除外する。頻出する「耶律」も対象外とした。中には漢人姓を冠しながらも名が契丹語名である者も確認されるが、そうした人名は採用した。一方、契丹人名であっても漢語由来の語彙をそのまま漢字表記しているものは対象としない。なお、契丹語と奚語の区別は困難なため、一律に採用している。

²⁴ 語頭の合計数と語末の合計数が一致せず語末の方が多くなっているのは、〈漢語語基+固有語接尾辞〉という語構成をとる半音写語の接尾辞部分のみを計上していることと、文献上で一部欠損のある音写語が含まれていることによる。

²⁵ 遼代音の韻母 **-ye* と **-a* は舒声音節では TC *-ya*, *-ya* (果假撮開口拗音) と TC *-a* (假撮開口

こうした漢語音節で音写するのが最適な契丹語音は、特定の調類の選好とは無関係に次濁入声字で音写せざるをえない。このような声調選択の自由がない漢字は当然除外して考える必要がある。表に見られるように、入声字（特に次濁入声字）にはこうした漢字が多いことには留意すべきである。

表5 清濁・四声カテゴリーおよび位置による遼代契丹語音訳漢字の分布

四声	清濁	語頭	語中	語末	単独	計
平声	清音	98 (96)	36 (35)	111 (106)	4 (3)	249 (240)
	次濁音	105 (100)	44 (44)	54 (54)	0 (0)	203 (198)
	全濁音	143 (135)	5 (5)	11 (11)	3 (3)	162 (154)
上声	清音	21 (20)	28 (28)	119 (119)	5 (5)	173 (172)
	次濁音	16 (15)	74 (73)	194 (185)	5 (2)	289 (275)
	全濁音	13 (13)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	16 (16)
去声	清音	33 (33)	3 (3)	18 (18)	5 (5)	59 (59)
	次濁音	8 (6)	1 (1)	6 (6)	0 (0)	15 (13)
	全濁音	7 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (7)
入声	清音	130 (84)	61 (58)	123 (119)	7 (1)	321 (262)
	次濁音	30 (12)	23 (9)	130 (26)	2 (0)	185 (47)
	全濁音	144 (131)	18 (17)	12 (11)	0 (0)	174 (159)
計		748 (652)	294 (274)	780 (657)	31 (19)	1853 (1602)

表からは、各種去声音節と全濁上声音節、次濁入声音節が類似の分布特徴を示すことや、全濁平声音節と全濁入声音節がきわめて類似した分布を呈し、次濁平声音節もそれらと概ね類似する分布を示すことなど、前節のデータと一貫した特徴を読み取ることができるが、このことは取りも直さず、契丹語の音訳漢字が声調を考慮して選択されていることを意味する。同一語内で同音異声調字が使用される音写語が存在することはその証左である。

- (8) 特里德 [TC $\text{d}\text{o}\text{g}^4 \text{li}^2 \text{d}\text{o}\text{g}^4$, YC $\text{d}\text{əy}^{1b} \text{li}^2 \text{d}\text{əy}^2$] 岔火 *dəld* (JAS)²⁶
 轄刺瞎 [TC $\text{x}\text{a}\text{d}^4 \text{l}\text{a}\text{d}^4 \text{x}\text{a}\text{d}^4$, YC $\text{xya}^{1b} \text{la}^3 \text{xya}^2$] 血₁ [*xeray* (JJQ)
 時始里 [TC $\text{š}^1 \text{š}^2 \text{li}^2$, YC $\text{š}^{1b} \text{š}^2 \text{li}^2$] 又赤₁ [*šežal* (WCY)
 達打 [TC $\text{d}\text{a}\text{d}^4 \text{d}\text{a}\text{ŋ}^2$, YC $\text{da}^{1b} \text{da}^2$] 令赤₁ [*tadar* (SZ)

ただし、各位置での声調の選好をより明瞭に把握するためには、対立する候補としてどの調類の漢字が存在するかを丹念に確認しながら検討する必要がある。以下では、語内の位置と音訳漢字の声母の種類に応じて、より綿密に音訳漢字の選択傾向

直音)にそれぞれ起源するが、これらの韻母は来母(TC1-)を含む舌頭音とは結合しないため、来母とも結合しうる入声韻母TC -yed(山拱開口拗音)とTC -ad(山拱開口直音)のみが遼代音の音節*lye,*laの起源となりうる。

²⁶ 以下、漢字文献での音写語例を示す際には、その原語の契丹小字表記とそのローマ字転写および()内に音写語例の出所を略号(本稿末尾の略号一覧参照)で示す。

を観察する。

3.3. 語頭における分布特徴

遼代漢語の音節はその声母の種類によって対立する調類の種類や数が異なるので、以下では声母を阻害音（中古影母を除く清音と全濁音）、共鳴音（中古喻母を除く次濁音）、ゼロ声母（中古影母・喻母）に分類し、阻害音はさらに有気・無気の破裂音（破擦音を含む）と摩擦音に分けて分析する²⁷。

はじめに語頭における音訳漢字の頻度を中古漢語の清濁・四声カテゴリー別に集計すると表6を得る。表では去声と影母入声以外の各カテゴリーを、前節の結論に基づき陰調か陽調かによって区分し、それらの中で対立する陰陽調の同音異声調字が存在する字のみを数えた頻度を各欄右側の括弧内に示した²⁸。影母入声を他の清入声とは区別して扱うのは1.2.3節で述べた事情を考慮したものだが、現有の材料からは遼代漢語での影母入声の帰類が定かでないので、本稿では考察の対象から外しておく。

表6 契丹語音訳漢字の語頭における声母と清濁・四声別の出現頻度

陰陽調		陰調			陽調		去声			?	計
清濁・四声		清平	清次濁上	清入	濁平	全濁入	清去	濁去	次入	影入	
阻害音	有気破裂音	2 (2)	10 (8)	47 (25)	82 (74)		10				151
	無気破裂音	7 (0)	7 (1)	30 (10)		103 (90)	6	6			159
	摩擦音	14 (4)	0 (0)	26 (2)	61 (57)	41 (41)	7	14			163
	計	23 (6)	17 (9)	103 (37)	143 (131)	144 (131)	23	20			473
共鳴音			12 (4)		46 (39)			6	27		91
ゼロ声母		75 (0)	8 (4)		59 (59)		10	2	3	27	184

阻害音声母音節では、去声を除くと最大で陰調の音節として清平声・清上声・清入声の3類、陽調の音節として全濁平声・全濁入声の2類の計5類の選択肢がありうるが、そのうち、同音の陰調字が存在する字がそれぞれ131例ある陽調2類の頻度が、同音の陽調字が存在する字が併せて52例しかない陰調3類に比べて顕著に高い。この傾向は、陽調の選択肢として次濁平声のみを取りうる共鳴音声母音節とゼロ声母音節においても認められる。阻害音声母音節では、同音の陽調字があるに

²⁷ 有気破裂音は中古次清音の滂・透・徹・清・初・昌・溪母および平声の全濁音である並・定・澄・從・群母の全部と崇侯・常船母の一部に、無気破裂音は全清音の幫・端・知・精・莊・章・見母および仄声の全濁音である並・定・澄・從・群母の全部と崇侯の一部に、摩擦音は全清音の非敷・心・生・書・曉母および全濁音の奉・邪・匣母の全部と崇侯・常船母の一部に相当する。崇侯母は止摂（TC -i）の仄声で摩擦音、それ以外で破裂音（破擦音）となり、常船母は一部例外があるものの、閉音節の平声で破裂音（破擦音）、それ以外で摩擦音となっている（大竹2020: 219-225）。

²⁸ 表の「濁平・濁去」は次濁・全濁の両方を含み、濁去声には中古全濁上声も含まれる。「次入」は次濁入声、「影入」は影母入声の略で、「清入」には影母入声を含めない。

もかわらず使用される清入声字が 37 例と比較的多く見られるが、そのうちの 21 例が「惕」[TC tyeg⁴, YC ti²] (cf. 「提」[TC dyey¹, YC ti^{1b}]) であり、すべて「惕隱」(原語 丕麥雨 *tibin*) という音訳表記が固定化した官称号での使用に限定されることは注意すべきである。共鳴音声母音節では次濁入声字の使用頻度も 27 例とやや高く見えるが、うち 22 例は「涅」[TC ⁿdyed⁴, TC nye³] のように他に同音異声調字をもたない字である。ゼロ声母音節では、一見すると清平声字の使用頻度が 75 例と最も高いが、それらはすべて同音の陽調(次濁平声)字をもたない²⁹。なお、影母入声字 27 例もすべて同音の陽調字をもたない。

以上より、語頭では、声母の種類を問わず陽調字(中古濁平声字または全濁入声字)が選択可能な音節であれば陽調字を選択するという極めて明瞭な選好が読み取れる。ところで、濁平声字と全濁入声字が唯一対立をなす摩擦音声母音節では、全濁平声字 61 例のうち 36 例が、同音の全濁入声字がありながら使用され、全濁入声字 41 例のうち 28 例が、同音の全濁平声字がありながら使用されており、両者が選択可能な音節では、どちらも大差のない頻度で使用されている。同一語が両方の字で音訳された例もある(舟丹 *χarb* に対する「何盧保」[TC xɑ¹, YC xo^{1b}] (QD) ~ 「曷蘆不」[TC xɑd⁴, YC xo^{1b}] (PL))。官話諸方言での通則や遼代漢語での関連現象をふまえると、遼代漢語では中古濁平声と全濁入声が同一の調類、すなわち陽平声に属した蓋然性が高い³⁰。そうであれば、語頭では専ら陽平声というただ 1 つの調類が好まれるということになる。

3.4. 語末における分布特徴

同様の方法で語末における音訳漢字の出現頻度を集計したのが表 7 である。

表 7 契丹語音訳漢字の語末における声母と清濁・四声別の出現頻度

陰陽調		陰調			陽調		去声			?	計
清濁・四声		清平	清次濁上	清入	濁平	全濁入	清去	濁去	次入	影入	
阻 害 音	有気破裂音	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)		0				2
	無気破裂音	67 (8)	76 (25)	103 (73)		5 (4)	5	1			257
	摩擦音	33 (28)	6 (4)	15 (8)	10 (10)	7 (7)	13	1			85
	計	100 (36)	82 (29)	119 (82)	11 (11)	12 (11)	18	2			344
共鳴音			176 (166)		53 (22)			6	102		337
ゼロ声母		11 (0)	55 (18)		1 (1)		0	0	28	4	99

²⁹ 75 例のすべてが「阿」[TC ^a, YC o^{1a}] や「烏」[TC ^wo¹, YC u^{1a}] のような直音音節(拗介音 /-y-/、/-w-/ をもたない音節)であるが、これらに同音の陽調字がないのは、陽調のゼロ声母音節の由来となる中古喻母音節がもともと拗音音節(拗介音をもつ音節)としてしか存在しなかったことに起因する。

³⁰ 遼代漢字石刻文獻中の韻文の押韻に反映される漢語音は保守的な特徴をもち、入声字は通常、入声字としか押韻しないが、『陳万墓誌銘』(955年)では次濁平声字「遣」[TC üy¹, YC i^{1b}] と全濁入声字「籍」[TC dzjeg⁴, YC dzi^{1b}]、 「極」[TC g:ig⁴, YC gi^{1b}]、 「石」[TC šjeg⁴, YC si^{1b}] が押韻している(黎新第 2009: 3)。これは、濁平声と全濁入声が合流していた口語音の反映として理解することができる。

語末では、語頭とは打って変わって声母の種類を問わず陽調（中古濁平声・全濁入声）字の使用頻度が低く、陰調（中古清平声、清・次濁上声、清入声）字の頻度がきわめて高い。共鳴音声母音節では次濁入声字が102例使用されているが、うち84例は前述した「烈」や「刺」のような同音異声調字のない字であり、ゼロ声母音節の次濁入声字28例のうち21例が同音異声調字のない「越」[TC ʷed⁴, YC ʷe³]（用例はすべて官称号 尺岑 *uh³əə* の音訳である「于越」）であって、次濁入声字が好んで使用されているわけではない。

陰調3類はどれも高頻度で使用されるが、原語が特定可能なものから判断する限り、清平声字には語末子音を音写した例（9a）が、清上声字には語末重音節を音写した例（9b）が多く、清入声字はその両方が見られる（9c）³¹。このようにそれぞれの音写対象の傾向が異なるので、陰調3類のうちどれが語末で最も選好されるかを一概に言うことはできない。

- (9) a. 烏魯姑 [TC ʷo¹ lwɔ² gwɔ¹, YC u^{1a} lu² gu^{1a}] 圪欠 *oroɣ^w* (ZF)
 b. 阿古 [TC ʷa¹ gwɔ², YC o^{1a} gu²] 呈爻 *ayuu* (WCK)
 夷离謹 [TC i¹ li¹ gin², YC i^{1b} li^{1b} gin²] 化儿尕 *irgan* (YNT)
 c. 烏魯骨 [TC ʷo¹ lwɔ² gwɔd⁴, YC u^{1a} lu² gu²] 圪欠 *oroɣ^w* (WH)
 撒八 [TC sɑd⁴ bad⁴, YC sa² ba²] 仝生尕本 *sabaar* (ZY)

なお、語末（および語中）で有気破裂音声母の字がほぼ使用されないのは、漢語の有気破裂音に対応する契丹語の強阻害音が語頭にしか立たないためで、同様の分布特徴は後代の編纂史料である『遼史』の漢字音写においても確認される（武内2015）。

3.5. 語中における分布特徴

契丹語の音写語は漢字2字のものが多く、語中（3字語の第2字と4字語の第2、3字）の音訳漢字の総数は語頭・語末に比して多くないが、出現頻度を集計すると表8が得られる。

表8 契丹語音訳漢字の語中における声母と清濁・四声別の出現頻度

陰陽調		陰調			陽調		去声		?	計	
清濁・四声		清平	清次濁上	清入	濁平	全濁入	清去	濁去	次入	影入	
阻害音	有気破裂音	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)		0			1	
	無気破裂音	26 (20)	27 (14)	50 (25)		16 (15)	1	1		121	
	摩擦音	9 (7)	1 (1)	9 (4)	4 (4)	2 (2)	2	0		27	
	計	35 (27)	28 (15)	59 (29)	5 (5)	18 (17)	3	1		149	
共鳴音			71 (69)		44 (44)		1	22		138	
ゼロ声母		1 (0)	3 (3)		0 (0)		0	0	1	2	7

³¹ 契丹小字は語末弱化母音を表記できないが、音声・音韻上はこれが存在した可能性があり、この「語末子音」は時に頭子音と弱化母音から成る語末音節である可能性もある。

語中では、陰調字と陽調字の選好に関して語頭や語末で見られるほど顕著な差はない。ところで、語中の音写字は、初頭音節の末子音を音写したもの(10a)、中間音節(の一部)を音写したもの(10b)、最終音節の一部を音写したもの(10c)に細分可能である。

- (10) a. 移离畢 [TC i¹ li¹ bi⁴, YC i^{1b} li^{1b} bi²] 用中 *ilbər* (PG)
 迪里鉢 [TC d̥yeg⁴ li² b̥ad⁴, YC di^{1b} li² bwo²] 舟中 *terbər* (ZX)
 b. 勃特不 [TC b̥oḏ⁴ ḏoḡ⁴ bu⁴, YC bu^{1b} dəy^{1b} bu²] 国半中 *budəlbər* (WT)
 塔北也 [TC taḃ⁴ boḡ⁴ ya², YC ta² bəy² ye²] 令生百爻 *tabəyɔər* (WSZ)
 c. 胡覩姑 [TC x̥wɔ¹ dwɔ² gwɔ¹, YC xu^{1b} du² gu^{1a}] 捺 *χuduγ^w* (YNL)
 胡都姑 [TC x̥wɔ¹ dwɔ¹ gwɔ¹, YC xu^{1b} du^{1a} gu^{1a}] 捺 *χuduγ^w* (WH)

この観点から見ると、原語が特定可能な音写字に限っての観察ではあるが、濁平声・全濁入声字は主に初頭・中間音節の音写に使用され、最終音節の音写に使用されることはほぼなく、反対に清上声字はほぼ最終音節の音写にしか使用されない。一方、次濁上声字はどの環境でも使用され、清平声・清入声字も中間音節・最終音節どちらでも使用される。阻害音声母音節の清平・入声字と共鳴音声母音節の次濁上声字の頻度が他に比して高いのは、この使用環境の広さゆえである。また、阻害音声母音節と共鳴音声母音節とで陰調字／陽調字の比率が異なるのは、契丹語において阻害音の音節末子音が語中では稀にしか生起せず、原語が2音節のものが多いために中間音節の総数も少ないため、阻害音声母音節では陽調字である全濁平・入声字の潜在的な使用領域が限定的であることが第一の理由である。加えて、清上声字が非最終音節では使用されにくいことから考えて、同じ調類に属するはずの次濁上声字も、実際には非最終音節で使用されているとはいえ、その位置では恰好の音写字ではなかったのであり、このことが共鳴音声母音節における次濁平声字の使用比率を押し上げていると推測される。これら諸点を考慮すると、語中のうち最終音節では陰調字が選好されるが、非最終音節では陽調字と陰調字の選好の程度が拮抗していると分析できる。

3.6. 小結

以上、複音節音写字の語内の位置ごとに声調の選択傾向を検討してきたが、その結果は表9に整理される。表では、選好されるカテゴリーを*で、特に選好されるカテゴリーを**で表示した。語頭では陽調字(濁平声・全濁入声字)が選好されるのに対し、語末および語中で最終音節を音写する場合には陰調字(清平・入声字と清・次濁上声字)が選好され、語中で非最終音節を音写する場合には陰調字と陽調字が相半ばする。

表9 複音節音写語における位置および清濁・四声カテゴリー別の選択傾向

漢字音写語内の位置		語頭	語中		語末
契丹原語の音節		初頭音節	中間音節	最終音節	
陰調	清平声			*	** **
	清上声				** **
	次濁上声		*	*	** **
	清入声			*	** **
陽調	濁平声	**	*	*	
	全濁入声	**		*	

なお、単音節の音写語では、総数が少ないため確かな結論は出せないが、去声字を除くと陰調字の使用が比較的多く、複音節語の最終音節の分布に近似するよう見える。また、2音節の音写語のいくつかは原語の閉音節の単音節語を音写したもののだが、その語頭では同音の陽調字がありながら陰調字（特に清上声字）を使用する例が一定数存在する。単音節語の場合は複音節語の最終音節に準ずる選択傾向があるように思われる。

- (11) 杪里 [TC tšyew² li², YC tšyew² li²] 𠵹𠵹 *čawr* (SJ)
 普里 [TC pwɔ² li², YC pu² li²] 𠵹𠵹 *puul* (Y...)

どの位置でも少数ながら使用される去声字については触れてこなかったが、この点は大竹（2020: 420–422）が網羅的に例を示して論じているように、契丹語の重母音（長母音・二重母音）を含む音節を音写するのに使用される顕著な傾向がある。ただし、重母音が高頻度で去声字によって音写されるわけではないことは、去声音節が持続時間の長さを示す目的には好都合だったとしても、調形の点では契丹語の音写に不向きであったことを示唆している。

4. 契丹語音訳語彙における声調選択傾向の意味

4.1. 遼代初期の漢語音における陰陽調の音声実現

本節では、前節の分析結果に音声学的・音韻論的解釈を与える。1.2.3節で見たように、陰調は清音音節に、陽調は全濁音音節に由来するため、かつては陰調が高く始まり、陽調が低く始まる調値を意味したことは疑いない。しかし、声調調値は時とともに変化するものであり、声母の清濁に附随する声調の音声的特徴であった体系から声母の清濁対立が失われ、声調自体の弁別的特徴へと遷ったのちは、ピッチの高低は本来の調値を保つとは限らないので、陰調字と陽調字の使い分けが即座にピッチの高低に結びつくわけではない。

しかし、ここで注目したいのは遼代漢語の時間的変異性である。大竹（2020: 439–443）によれば、遼代漢語の中でも遼代初期（960年頃まで）の漢語変種はそれ以降の遼代漢語とは音声的・音韻的特徴が大きく異なっていた。

- (12) a. 涅列 [TC ⁰dyed⁴ lyed⁴, YC nye³ lye³] 令用券 *diləə* (YZ)³²
 兀欲 [TC ⁰gwɔd⁴ yɔg^w, YC u³ ü³] 岫爻 *ɣuyuu* ³³
 掘劣 [TC ⁰g-üd⁴ l-wed⁴, YC g-ü^{1b} l-wē³] 仄安爻 *kurəər* (JJQ)
 朮寶 [TC ⁰ḍüd⁴ baw², YC d-žü^{1b} baw²] 來乃北 *čobor* (YZ)
- b. 迪列 [TC dyeg⁴ lyed⁴, YC di^{1b} lye³] 令用券 *diləə* (WYN)
 骨欲 [TC gwɔd⁴ yɔg^w, YC gu² ü³] 岫爻 *ɣuyuu* (SJ)
 渠列 [TC ⁰g-yo¹ lyed⁴, YC kü^{1b} lye³] 仄安爻 *kurəər* (ZF)
 除鉢 [TC ⁰ḍyo¹ bəd⁴, YC t-šü^{1b} bwo²] 來乃北 *čobor* (WH)

(12a) は遼代初期の音訳例で、契丹語の語頭の弱阻害音 *d-*, *ɣ-* が中古次濁閉鎖音 ⁰d-, ⁰g- で、また語頭の強阻害音 *k-*, *č-* が仄声全濁音 ⁰g-, ⁰ḍ- で音写されている。一方、(12b) のように 11 世紀以降の音訳例では、契丹語の弱阻害音は中古仄声全濁音と全清音に起源する無気阻害音で、契丹語の強阻害音は平声全濁音と次清音に起源する有気阻害音で音写されるのが原則である。11 世紀以降の音訳では中古次濁閉鎖音は契丹語の鼻音の音写に、仄声全濁音は弱阻害音の音写に充てられる。このように遼代初期と遼代後期とでは漢語音に大規模な変化が生じているが、遼代初期の漢語音は明らかに唐代長安音に類似する中古漢語的性格を保持している。これは遼代 (907-1125) が唐代 (618-907) と年代的に相接していることをふまえれば何ら不思議はない。音韻論的な意味での陰陽調分裂が声母の清濁体系の変化の結果であるとするならば、遼代初期の漢語音は依然として本来の音声的な陰陽調の調値を保持する音韻体系であった蓋然性が高い。そして重要なことに、遼代初期の音訳語彙においても、語頭に陽調字を、語末に陰調字を用いるという選好はきわめて明瞭に観察される。

- (13) 轄刺瞎 [TC ⁰xad⁴ laḍ⁴ xad⁴, YC xya^{1b} la³ xya²] 血𠬞 *χeray* (JJQ)
 曷魯 [TC ⁰xad⁴ lwo², YC xo^{1b} lu²] 育爻 *χaruu* (WHL)
 胡咄 [TC ⁰xwo¹ dwɔd⁴, YC xu^{1b} du²] 捺 *χuduɣ^w* (HD)
 達靺 [TC ⁰ḍad⁴ ḍad⁴, YC da^{1b} da²] 令赤本 *tadar* (JN)

したがってこのことは、遼代初期の契丹語が、初頭音節のピッチが低く、末音節のピッチが高いという一定の音調形式を有したことを意味していると解釈することができる。さらに、同様の選好が遼代後期の漢字音写においても認められるということは、後期遼代漢語において陰陽調の調値に大きな変化はなく、遼代後期の契丹語も同様の音調形式を有したことを意味していると解釈することができよう。

³² 音写字「涅」は、ここでは原語 *di* に対応することから、特殊な読音 [TC ⁰di⁴, YC ni³] で読まれたと推測される。この読音は唐代のサンスクリットの音節 *nir*, *ḍr* を音写するのに用いられている (e.g. 涅哩夜多 *niryāta*, 涅哩茶 *ḍṛḍba*; 『慧琳音義』「寧逸反」)。

³³ 石刻文献ではないが、『旧五代史』漢書二・天福 12 年 (947) 条に見える。

4.2. 現代モンゴル諸語の音調からみた契丹語の音調の機能

契丹語音調の理解の一助として、同系言語である現代モンゴル諸語の音調について確認しておきたい。モンゴル諸語は語彙声調 (lexical tone) も語彙強勢 (lexical stress) も持たないが、韻律語もしくはアクセント句 (accentual phrase) 等、後語彙的な韻律単位の境界で実現する句音調 (phrasal tone) をもつ “phrase language” (Féry 2010, 2017: 269–281) に分類される言語であり、どの語も単独で韻律単位を構成する場合には基本的に同じピッチ曲線を呈する (Karlsson 2005: 100–103, 2014)。最もよく研究されているモンゴル語ハルハ方言では、初頭の2モーラでピッチの上昇が見られ、この第1モーラに結びつくL音調と第2モーラ (初頭音節に短母音があれば第2音節、長母音・二重母音があれば初頭音節の後半) に結びつくH音調の連なりがアクセント句 (または韻律語) の左端を示す境界音調として機能する (ibid.)。この記述は白音門徳 (2014: 304–305) の示すハルハ方言の音高データとも整合的で、呼和 (2009: 174–193, 2018: 449–467) や白音門徳 (2014: 290, 300) の示すチャハル方言のデータとも並行する。これらの方言では、第2モーラでピッチが最大値をとったあと、後続のピッチはほぼ同じ高さを保つか緩やかに下降する。

しかし、すべてのモンゴル諸語が同じピッチ曲線を示すわけではない。白音門徳 (2014: 291–292, 301–302) のデータによれば、とりわけホルチン方言やハラチン方言など内蒙古東部のモンゴル語方言において最終音節のピッチが最も高いという顕著な傾向がある。これと同様の傾向を示すのは内蒙古東北部で話されるダゲール語で、ハ斯其木格 (2019: 190–200) のデータによれば、ピッチは初頭音節で最も低く、後続音節ではほぼ横ばいか緩やかに上昇したのち、最終音節で最も高くなる。詳しいイントネーション音韻論的分析は今後の研究の進展を待たなければならないが、これらの言語・方言では、初頭のL音調が韻律単位の左端を示すとともに、末尾のH音調が韻律単位の右端を示す機能を果たしているようである。

契丹語の漢字音訳語彙において漢語声調が一定の分布を示すことは、音訳漢字が声調を考慮して選択されていることを示すだけでなく、契丹語が現代モンゴル諸語のような phrase language であったことを物語っている。ここで改めて音訳語彙の語中音節 (原語の最終音節に当たる場合を除く) で陰調字と陽調字の頻度が拮抗することを考えてみると、これは契丹語が韻律語またはより上位の韻律単位の右端をH音調で示すタイプの言語であったことを示唆しているように思われる。というのも、ハルハ方言のような左端をLH音調で標示する言語であれば、高調を示す陰調字が語末よりむしろ (初頭寄りの) 語中音節にこそ集中すると予想されるからである。契丹語音訳語彙の陰陽調字の分布は、この言語が左端をL音調で明示し、緩やかなピッチの上昇ののち右端をH音調で明示するという、左右両端の2つの境界画定機能をもつ音調によって形づくられるピッチ曲線を有したことを示すと解釈できる。

契丹語は現代モンゴル諸語の同系言語とは言え、それらと直線的な祖先・子孫関係は持たない。しかしながら、分節音、特に母音の体系においては、かつて契丹語

が話された地域に分布している東部のモンゴル諸語・方言と親和的な特徴がある。韻律の面においてもそれらに類似する特徴があるとすれば、言語接触による両者の関係性を考える上で興味深い。

5. おわりに

本稿では、遼金代の契丹小字文献中の漢語語彙に見られる余剰表記と、遼代漢字文献中の契丹語音訳語彙に使用される音訳漢字の位置別の分布特徴という2種類の対音資料上の手がかりを利用して、契丹文字では書き分けることのない契丹語の韻律的特徴を明らかにした。本稿の議論からも、これらの対音資料が漢語音韻史においても、契丹・モンゴルの歴史言語学的研究においても、ひいては文献資料から死言語の音声・音韻を再建する研究一般においても、重要な価値を有する言語資料となることが了解されよう。なお、本稿で用いた漢字音訳語彙は遼代の漢字石刻文献から収集したものだが、契丹に関わる漢字文献としては他に、元代末期に編纂された歴史書『遼史』(1344年成書)がある。同書の編纂材料は遼代文献だけでなく金代文献も含んでいるが、確かにその音訳語彙には遼代石刻文献と共通する音訳表記もあれば、そうでないものもある。そうした『遼史』に見られる遼代の表記とは異なる音訳形式は、声調について考慮していないと考えてよいのか、それとも別の漢語変種の声調上の選好を反映するのか、今後検討する価値はある。

略号一覧

【契丹小字文献】

- D.CAL 『*Diwrən Čalaa* (耶律仁先) 墓誌銘』(1072年)
 DIW 『*Üriyən Diwr* (耶律紇里) 墓誌銘』(1103年)
 DZ 『道宗皇帝哀冊文』(1101年)
 GAW 『*Onyūn Gaw-sib* (耶律高十) 墓誌銘』(1076年以後)
 HB 『皇太叔祖耶律弘本墓誌銘』(1110年)
 K.DIL 『*Kungūn Dilə* (耶律承窺) 墓誌銘』(1101年)
 LAO 『敖漢旗新地鄉老虎溝出土墓誌殘石』(1171年)
 MEN 『*Meenzən* (顯武將軍蕭公) 墓誌銘』(1175年)
 NU 『*Guyən Nuu* (耶律奴) 墓誌銘』(1099年)
 O.JUR 『*Orəyən Jūurjə* (蕭仲恭) 墓誌銘』(1150年)
 PUL 『*Gawñ Puu-liw* (蕭慎徽) 墓誌銘』(1057年)
 PUZ 『*Bayñ Puuzubə* (耶律思齊) 墓誌銘』(1105年)
 S.DIL 『*Sarəbañ Dilə* (耶律敵烈) 墓誌銘』(1092年)
 TAD 『蕭孝思妻 *Tadii* 墓誌銘 (故耶律氏銘石)』(1115年)
 TAY 『*Dorəlaḥaān Tay-saan · Ngew-zee* (蕭彥弼・永清公主) 夫妻墓誌銘』(1095年)
 TOG 『*Puunuuñ Toyozər* (蕭凶古辞) 墓誌銘』(1068年)
 UJE 『*Ujəñ* (耶律玦) 墓誌銘』(1071年)
 UMR 『*Üvrduḥooñ Umur* (耶律兀没) 墓誌銘』(1102年)
 URD 『*Əzənən Üvrduḥulaḥaar* (耶律幹特刺) 墓誌銘』(1105年)
 URH 『耶律弘本妻 *Uurəbən* (宋魏国妃) 墓誌銘』(1110年)
 UYE 『*Awluḥooñ Uyə* (耶律弘用) 墓誌銘』(1100年)
 YER 『*Orəlbən Yeeruu* (耶律智先) 墓誌銘』(1094年)

【漢字文獻】

- HD 『耶律胡咄墓誌銘』(950年)
 JAS 『創建靜安寺碑銘』(1072年)
 JJQ 『大王記結親事碑』(923年)
 JN 『耶律君寧墓誌銘』(945年)
 PG 『蕭杞哥墓誌蓋』(1037-43年間)
 PL 『蕭袍魯墓誌銘』(1090年)
 QD 『耶律懃德墓誌銘』(960年)
 SJ 『耶律庶幾墓誌銘』(1059年)
 SZ 『耶律遂忠墓誌銘』(1038年)
 WCK 『耶律承窺妻蕭氏墓誌銘』(1091年)
 WCY 『耶律昌允妻蕭氏墓誌銘』(1092年)
 WH 『蕭和妻耶律氏墓誌銘』(1045年)
 WHL 『耶律曷魯妻墓誌銘』(943年)
 WSZ 『蕭紹宗妻耶律氏墓誌銘』(1038年)
 WT 『蕭闍妻耶律氏墓誌銘』(1069年)
 WYN 『蕭延寧妻耶律氏墓誌銘』(1009年)
 Y... 『耶律延□墓誌銘』(1055年)
 YNL 『耶律元寧郎君墓誌銘』(1015年)
 YNT 『耶律元寧太尉墓誌銘』(1008年)
 YZ 『耶律羽之墓誌銘』(942年)
 ZF 『耶律宗福墓誌銘』(1072年)
 ZX 『耶律智先墓誌銘』(1094年)
 ZY 『耶律宗允墓誌銘』(1065年)

參照文獻

- 白音門德 [Bayanmendü] (2014) 『蒙古語實驗語音學研究』呼和浩特：內蒙古人民出版社。
 北京圖書館金石組 (1990) 『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本彙編 第45冊 (遼金西夏一)』鄭州：中州古籍出版社。
 曹志耘主編 (2008) 『漢語方言地圖集 語音卷』北京：商務印書館。
 陳淑靜 (1994) 「古四聲在河北方言中的演變」『河北大學學報 (哲學社會科學版)』1994(2): 76-83。
 赤峰文博院 (2021) 『石墨芳華：劉鳳翥李春敏收藏遼金碑刻拓本集』北京：文物出版社。
 清格爾泰 [Čenggeltei] · 吳英喆 · 吉如何 [Jirüke] (2017) 『契丹小字再研究』呼和浩特：內蒙古大學出版社。
 Féry, Caroline (2010) Indian languages as intonational ‘phrase languages’. In: Imtiaz Hasnain and Shreesh Chaudhary (eds.) *Problematising language studies: Cultural, theoretical and applied perspectives—Essays in honor of Rama Kant Agnihotri*, 288-312. New Delhi: Aakar Books.
 Féry, Caroline (2017) *Intonation and prosodic structure*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
 傅林 (2019) 『契丹語和遼代漢語及其接觸研究』北京：商務印書館。
 蓋之庸 (2007) 『內蒙古遼代石刻文研究 (增訂本)』呼和浩特：內蒙古大學出版社。
 Giet, Franz (1946) Phonetics of North-China dialects. *Monumenta Serica* 11: 233-267.
 龔煌城 (1981) 「十二世紀末漢語的西北方音 (聲母部分)」『中央研究院歷史語言研究所集刊』52(1): 37-78 (『漢藏語研究論文集』243-281. 臺北：中央研究院語言學研究所籌備處, 2002年).
 何大安 (1988) 「『濁上歸去』與現代方言」『中央研究院歷史語言研究所集刊』59(1): 115-140.
 河北省昌黎縣志編纂委員會 · 中國社會科學院語言研究所 (1960) 『昌黎方言志』北京：科學出版社。
 河北省地方志編纂委員會 (2005) 『河北省志 · 方言志』北京：方志出版社。
 Karlsson, Anastasia Mukhanova (2005) *Rhythm and intonation in Halb Mongolian*. Lund: Lund University.

- Karlsson, Anastasia M. (2014) The intonational phonology of Mongolian. In: Sun-Ah Jun (ed.) *Prosodic typology II: The phonology of intonation and phrasing*, 187–215. Oxford; New York: Oxford University Press.
- 金田一春彦 (1951) 「日本四声古義」寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸 (共編) 『国語アクトレント論叢』627–703. 東京: 法政大学出版局 (『金田一春彦著作集 第9巻』91–162. 東京: 玉川大学出版部, 2005年).
- 小西甚一 (1948) 『文鏡秘府論考 研究篇上』京都: 大八洲出版.
- 呼和 [Kóke] (2009) 『蒙古語語音實驗研究』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 呼和 (2018) 『蒙古語語音聲學研究』北京: 社會科學文獻出版社.
- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages*. Oxford: Blackwell.
- 李范文 (1994) 『宋代西北方音』北京: 中國社會科學出版社.
- 李榮 (1952) 『切韻音系』北京: 中國科學院 (北京: 科學出版社, 1956年再版, 北京: 商務印書館, 2020年再版).
- 李榮 (1985) 「官話方言的分區」『方言』1985(1): 2–5 (李榮 2012: 37–41).
- 李榮 (1989) 「漢語方言的分區」『方言』1989(4): 241–259 (李榮 2012: 62–84).
- 李榮 (2012) 『方言存稿』北京: 商務印書館.
- 黎新第 (2009) 「在遼代石刻韻文中見到的遼代漢語語音」『古漢語研究』2009(1): 1–7.
- 李旭 (2008) 「河北省中部南部方言語音研究」博士論文, 山東大學.
- 劉勳寧 (1995) 「再論漢語北方話的分區」『中國語文』1995(6): 447–454 (『現代漢語研究』56–72. 北京: 北京語言文化大學出版社, 1998年).
- Maspero, Henri (1920) Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* 20(2): 1–119.
- 沼本克明 (1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』東京: 武蔵野書院.
- 大竹昌巳 (2015) 「契丹小字文獻における母音の長さの書き分け」『言語研究』148: 81–102.
- Ôtake, Masami (2017) Reconstructing the Khitan vowel system and vowel spelling rule through the Khitan Small Script. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 70(2): 189–206.
- 大竹昌巳 (2020) 「契丹語の歴史言語学的研究」博士論文, 京都大学.
- 哈斯其木格 [Qaschimöge] (2019) 『達斡爾語音系實驗研究』北京: 社會科學文獻出版社.
- 錢曾怡主編 (2010) 『漢語官話方言研究』濟南: 齊魯書社.
- 頼惟勤 (1951) 「漢音の声明とその声調」『言語研究』17/18: 1–46 (『頼惟勤著作集 I 中国音韻論集』383–439. 東京: 汲古書院, 1989年).
- 沈鍾偉 (2006) 「遼代北方漢語方言的語音特徵」『中國語文』2006(6): 483–498.
- Shen, Zhongwei (2007) Sino-Khitan phonology. *Bulletin of Chinese Linguistics* 1(2): 147–210.
- 沈鍾偉 (2012) 「契丹小字漢語音譯中的一個聲調現象」『民族語文』2012(1): 39–50.
- 武内康則 (2015) 「『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻」『内陸アジア言語の研究』30: 1–27.
- 王綿厚・王海萍 (2000) 『遼寧省博物館藏墓誌精粹』東京: 中教出版.
- 向南 (1995) 『遼代石刻文編』石家莊: 河北教育出版社.
- 向南・張國慶・李宇峰 (2010) 『遼代石刻文續編』瀋陽: 遼寧人民出版社.
- 楊福綿 (1960) 「保定東閩方言の聲調」『中国語学』97: 9–13.
- 楊同用 (1996) 「河北無極方言音系記略」『河北大學學報 (哲學社會科學版)』1996(4): 55–62.
- 周阿根 (2022) 『遼代墓誌校注』天津: 天津古籍出版社.
- 周法高 (1948) 「玄應反切考」『中央研究院歷史語言研究所集刊』20: 359–444 (『中國語言學論文集』153–238. 香港: 崇基書店, 1968年).
- 朱曉農 (2010a) 『語音學』北京: 商務印書館.
- 朱曉農 (2010b) 「全濁弛聲論——兼論全濁清化 (消弛) 低送高不送」『言語研究』30(3): 1–19.

執筆者連絡先:

[受領日 2022年9月1日]

京都大学大学院文学研究科

最終原稿受理日 2023年10月31日]

e-mail: otake.masami.4c[at]kyoto-u.ac.jp

Abstract**Pitch Realization in Khitan**

MASAMI ŌTAKE

Graduate School of Letters, Kyoto University

The aim of this article is to reconstruct the word/phrase pitch pattern in Khitan, an extinct language related to the Mongolic languages that was spoken in Manchuria and northern China during the Liao dynasty (907–1125). We do this by using transcriptional materials of Khitan and Liao Chinese, a local variety of Chinese spoken in that region at that time. First, as preliminary work, we critically review the special notation for tones in Khitan Small Script transcriptions of Chinese words, and reanalyze it from a quantitative perspective, thereby revealing a significant aspect regarding the tonal system of Liao Chinese. Building on this finding, we quantitatively analyze the Chinese characters used for transcribing Khitan words according to their position within the word, showing a clear preference for specific tonal categories based on position. Furthermore, taking into consideration the temporal variability within Liao Chinese and the pitch patterns in modern Mongolic languages, we interpret the tonal preference in Chinese transcriptions of Khitan words to mean that Khitan was a phrase language with an L tone at the left edge and an H tone at the right edge of every word or phrase.